様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３０２１

研究課題名（和文）「琉球王国評定所文書」及び近世先島地方公文書の料紙に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Examination of Writing Paper Used for Ryukyu Okoku Hyojosho Monjo and the Official Documents of the Sakishima region in the Early Modern Period

研究代表者
前村　佳幸（MAEMURA, Yoshiyuki）

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０４５２９５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、『琉球王国評定所文書』の原本と近世先島地方における古文書・古記録類について、料紙的な観点からアプローチすることにより、近世琉球王府における行政と楮紙との強い選択的関係を明らかにした。近世琉球において楮紙は「百田紙」などと呼称され、紙の用途が広がり需要も高まったにもかかわらず、米糊などの填料が使用されず、地合いにも影響を及ぼしていると推測される。
先島地方の調査では、地方役人個人の勤務記録である「勤書」について、宮古島市にて最古の資料を確認し、顕微鏡分析により「家譜」と同じ楮紙であることを解明した。さらに、近世琉球における中国的宗廟祭祀の受容について体系的な研究を進展させることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古文書・古典籍については、まず所在調査により散逸亡失が防がれ保存状態の向上が図られる。その後、必要に応じて修復作業が行われ、影印や翻刻出版により内容の精読が可能となり、史資料として活用されていく。修復過程では、冊子体の資料も一丁ごとに分解されるので、紙の厚さ、擂筆などの所見を調査票に記録し、料紙の原料についても顕微鏡分析を行い画像データを集積できる。戦禍を免れた沖縄関係の希少な資料は、一紙文書よりも関連書類を綴じた一件書類が多い。この種の資料に対して修復と連携した総合的な研究を行い、所在調査・修復・料紙分析と一貫した研究の重要性について関係者の理解を広げることに最大の学術的社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study clarified a strong selective relationship between the administration and kozo paper made of kazinoki in the Ryukyu Kingdom in the early modern period. To this end, this study examined the original Ryukyu Okoku Hyojosho Monjo (supreme court documents of the Ryukyu Kingdom) and ancient documents as well as historical records of the Sakishima region in the early modern period from the perspective of writing paper. In early modern Ryukyu (Okinawa at present), kozo paper was called kajigami or momotagami. Although the use of paper expanded and its demand increased, fillers such as rice glue were not used in its manufacture. Therefore, the contexture (quality) of the paper was presumed to be low. When we surveyed the Sakishima region, we examined the oldest documents of Tsutomegaki in Miyakojima City. Through microscopical analysis, we discovered that the paper used for Tsutomegaki was the same as that used for the genealogical table of a family (namely, kozo paper).

研究分野：歴史学

キーワード：近世琉球の料紙　C染色液呈色反応による料紙分析　近世琉球の楮紙　近世先島地方における勤書　近世先島地方の士族と継承　近世琉球の宗廟　近世琉球の廟議　旧琉球藩評定所書類の料紙

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

前近代の沖縄の公文書・典籍類は経年により廃棄処分されただけでなく、戦禍により原本の多くが亡失した。近世琉球の政治の中枢である、摂政と三司官により構成された評定所関連の文書・記録類は、琉球処分後、明治政府に接収され、「旧琉球藩評定所書類」として内務省の所管となった。しかし、現物のほとんどが関東大震災により失われ、東京大学法学部法制史資料室における近代の写本（琉球藩評定所記録）、および史料編纂所の 3 点、そして警視庁の倉庫に遺されていた 21 点のみとなり、本来の配列と内容は、「旧琉球藩評定所書類目録」（内務省作成の目録を東京帝国大学史料編纂所で写したもの）の表題から窺うしかない。その作成年代は 1623 年から 1879 年までで近世のほとんどをカバーしているが、現存する最古の資料は雍正 11・12 年（1733/1734）の東京大学法学部法制史資料室所蔵写本であり、国立公文書館に移管された警視庁保管の原本では、咸豊 4 年（1854）以降となる。そのため、およそ 1850 年代から約半世紀の間の資料である。しかしそれでも、現存する近世琉球の史資料として極めて希少な存在であって、幕末に来航した外国船や上陸した外国人への対応など対外的な内容が多くを占めるが、財政、裁判、薩摩との折衝、首里城における日々の政務記録など多様な内容を含んでいる。

この史料的価値が重視され、1980 年代には、沖縄県浦添市の事業として、全体の整理と翻刻が行われ、『琉球王国評定所文書』全 19 巻（18 巻補遺別巻）として刊行された（以下、「評定所文書」と略称）。また、原本を収蔵する国立公文書館や東京大学史料編纂所では、マイクロフィルム撮影の上でそのデジタル画像をウェブ上で公開している。さらに、「沖縄の歴史情報」の一環として、「琉球王国評定所文書の情報化」が推進され、琉球家譜などと共にウェブ上におけるテクストの逐語索引システムが稼動していた（現在休止中）。これらの成果により、歴史学の研究のために、「旧琉球藩評定所書類」の原本を直接閲覧する必要性はむしろ低下したといえよう。そして、尚家より那覇市に寄贈された「琉球国王尚家関係資料」（那覇市歴史博物館所蔵）には文書・記録・典籍類 1166 点が含まれている（以下、「尚家文書」と略称）。この文献資料は一括して国宝に指定されているが、閲覧のために複製本の作成が進められている。このように、近年、比較的大部な文献資料が整理され、研究者の利用が可能となっており、歴史研究を進展させるものと大いに期待されている。

他方において、「八重山諸島を中心とした古文書調査報告書」（1981 年）などによると、直接的な戦禍が比較的軽微であった先島地方には、近世の地方文書や文献が遺されており、その一部が「石垣市史叢書」などとして刊行されている。その原本は石垣市立八重山博物館に寄託されたものが多い。近世、八重山と同じ統治体制が敷かれた宮古島地方においては、これから、宮古島市総合博物館を中心に所在調査と寄託受け入れなどの活動が本格化するものと思われる。先島地方には近世琉球の統治と社会との関係を探る上で重要な資料が存在しており、その調査の学術的な意義はかなり高いと考えられる。

このように、古い文献への関心が高まると、まず所在調査を契機として散逸亡失が抑止され保存状態の向上が図られる。その後、状況に応じて収蔵機関による修復事業が行われ、影印や翻刻出版により内容の精読が可能となり、史資料として活用されていく。修復はその鍵となる作業であるが、リーフキャスティングのような技法でも現状が変化し修復後には料紙の厚さや角筆文字などを調査することは困難となる。修復が保存状態の向上を最優先して行われると、収蔵者と修復業者間の問題となり、古文書学的調査を行う貴重な機会を逸してしまうのである。修復と料紙の調査を並行して行うことが重要であり、広く理解されるべきである。そこで、本研究代表者の先の研究「『遺老説伝』の総合的研究」（基盤研究 C 一般：課題番号 25370783）においては、伊波普猷文庫『遺老説伝』四冊本を対象として、修復事業を提起し、修復業者の工房にて料紙調査を行った。「評定所文書」の原本にせよ先島地方における資料にせよ、一紙文書よりも関連書類を綴じた冊子体が多いので、古典籍の装幀を解いて行う先の研究は、現存する近世琉球の文献資料の調査に応用される、基本的な手法を確立することを念頭に実施した。

本研究は、その成果を継承して、より広範囲かつ重要性の高い資料を柔軟に選択・調査し、所在調査・修復・料紙分析と一貫した研究の重要性について、研究者はもとより地方自治体など関係者の理解を広げることを大きな目的として構想されたものである。

２．研究の目的

古い文献資料（公文書、記録、法規、典籍、書簡）のテキストデータ化により、その現物に対する関心が希薄となり、とりわけ、料紙について十分な知見を得ることができないと、資料の価値を全面的にくみ取ることは困難となっていくだろう。古い文献資料は、作成時期はもとより、内容・種類・様式などにより、その料紙が異なる。その現物に即しつつ体系的に把握していく研究は、テキストの様式や内容の検討のみでは得ることのできない、多面的な歴史理解をもたらす。

沖縄の古文書学研究においても、本土や中国からの手漉き紙の流入という側面のみならず、島嶼地域に根付いた紙づくりも視野に入れ、料紙を分析する手法を取り入れるべきである。その実現のためには、近世琉球の文書類の物質的側面に着目した研究を推進する必要がある。中世の古文書料紙研究においては、その蓄積があり、古琉球の起請文も分析対象となり、そのデータは体系化され、比較検証材料として活用されている（富田正弘「中世における牛玉宝印」の料紙について」、2015 年）。また、16 世紀から 19 世紀に及ぶ辞令書の用紙の変遷を検討した研究では、琉球の紙づかい慣行の時代的変化を通し、琉球と薩摩の関係、王府による政治的意図との関連性など、文書の内容面からは直接知ることのできない、権力のあり方を明確にしている（富田正弘

「琉球国発給文書と竹紙」、2007 年)。このような先行研究に学びつつ、より多様な内容で大部の資料である「評定所文書」に取り組み、併せて同時期の先島地方の文書にも目配りすることによって、将来的には、「尚家文書」や日本の近世文書の紙料研究にも資するような、基礎的知見を得たい。そのために、以下のような目的が設定される。
①近世の琉球における紙づかいの特性を体系的に理解するために、近世琉球の政権中枢で作成された「評定所文書」原本に着目し、その料紙について悉皆的な研究を推進するための基盤を構築する。
②幕藩体制における琉球について、薩摩や幕府と往来した文書の紙料の種類や紙質の観点から、課題を浮き彫りにする。
③近世琉球における先島地方行政と地方役人層に関する書類について、当地固有の料紙の観点から検討し、島嶼社会の諸相を明らかにする。
④複数の用紙が綴じられている「評定所文書」のような資料に対する調査方法を確立する。
「評定所文書」の料紙は百田紙とされている。そのため、「琉球王国評定所文書刊行事業完了記念シンポジウム報告書　百田紙に記された琉球の近世」(2002 年)と題されるけれども、百田紙がいかなる料紙なのか、実際に明らかにされたわけではない。琉球の百田紙が日本各地のそれと同等のものなのかどうか、現物に即した客観的なデータをもって示されているわけではない。これまでの沖縄県の文化財所在調査報告書は、沖縄における手漉き紙の製法や質感に熟知した研究者による肉眼的所見や触感に基づいている。今後、その認識をより客観的なものとして、広く浸透をはかっていくためには、呈色反応を示す繊維写真などのデータが求められる。そのための分析は、高知県立紙産業技術センター技術部長の大川昭典氏に委託されてきた(「尚家関係資料総合調査報告書Ⅰ(古文書編)」2003 年)。①～④の目的達成のためには、この手法を「評定所文書」をはじめとする沖縄の古文書・古典籍に広く応用すべきであり、本研究代表者の手で行われるべきである。そして、④のような資料については、専門家による修復作業との連携が不可欠である。
これまで、本研究代表者は「尚家文書」や沖縄県立図書館東恩納咸淳文庫などでの調査により、政務記録類は楮紙、典籍類は竹紙に大別されるという認識を得た。どちらかというと、前者の紙質は高級ではなく、後者は中国から輸入した貴重品である。典籍に比べ量的に圧倒的多数の各種文書の料紙と紙質について、計量的に把握する必要性がある。そして、「評定所文書」は辞令書と比べると、期間的な幅は狭いのであるが、富田正弘氏によると、辞令書(首里の御詔)の多くは所有者よって軸装されており、透過光による分析が困難であったという。つまり、一括して保存されている「評定所文書」は、収蔵機関の理解さえ得られれば、裏側から透過光を当てる調査を行うことができ、より確実な調査結果が期待できるのである。
本研究においては、「評定所文書」を対象とすることにより、文書の内容－行政機構の意志決定プロセスや薩摩との密接な交渉などと関連づけることも試みる。その成果は、原本に即した、「評定所文書」の新たな史料的価値を示すことになるだろう。なお、琉球内部における中央と地方との関係において、注目されるのが、先島地域における青雁皮紙の文書である。近世において、薩摩より和紙づくりが導入された琉球においては、先島でも公用用紙として百田紙・杉原紙が漉かれたといわれている。近世末期になると、石垣島では島内に自生するアオガンピを原料とした文書が作成されたという(上江洲敏夫「琉球紙の歴史」、1982 年)。本研究では、その現状を調査し料紙の繊維などを分析するとともに、隣接する宮古島における青雁皮紙を料紙とした文書を確認したい。これは、本研究代表者の「『遺老説伝』の総合的研究(基盤研究 C 一般：課題番号 25370783)の調査において、伊波普猷文庫『遺老説伝』三冊本の表紙の中に使用されていた宗門改文書(修復済み)の一部が青雁皮紙であることが判明し、宮古島でも青雁皮紙を抄造し公文書として使用する状況があったと考えられるからである。
上記の研究目的のもと、近世琉球の文書について、中央と地方の双方を対象として、料紙の法量・原料繊維・漉き方や使い方など物質的側面から体系化を行うことにより、幕藩体制国家における琉球と琉球内部の統治体制の両面を明らかにすることが期待される。そして、本研究の主たる目的は、近世における琉球、本州、東アジアにおける紙づかいの系譜に関する研究基盤を構築することである。

３．研究の方法

基本的な調査は非破壊を鉄則とし、以下の手法を基本として推進した。
まず、トレース台やライトボックス(FUJICOLOR LED タイプビュワー LED ビュアープロ 4X5、品番 56920)による透過光で文書の表面を観察する。簀の本数を数え糸目幅を測定して用具に関する情報を集め、繊維塊など紙質を把握する。寸法に加えて、重量を計量し、紙厚計測機器(尾崎製作所：ピーコック・ダイアル・シネクス・ゲージＨ型、ミツトヨ：デジマチック シックネスゲージ品番 547-301)を用いて天・地・袖・奥の厚さを計測することで、重量密度が計算できる。さらに、100 倍率のワイドスタンドマイクロスコープ(ピーク社№2064-100)を文書の表面に当て原料繊維の種類と異物などを観察する。このマイクロスコープは 320g と軽量であり、その対物レンズは樹脂製のフレームの内部で上下する構造のため、資料に接触するのはこのフレームの円形の外縁部のみであり、観察の際に資料にかかる圧力も少ない。その影響は、撮影のためにガラス製の文鎮(310g×２)を置くことに比べると少ないと考えられる。資料とフレームの間に台紙を挟むことにより、さらに圧迫を軽減することができる。こうした細心の配慮の下、マイク

ロスコープに装着した CCD カメラ（500 万画素以上）と 1／2.5 インチのレンズを USB ケーブルでノートパソコンに接続し、繊維画像を確認しながら、デジタルデータとして収集することも可能である。

調査の所見は、「文書料紙調査表」に記入している。「文書料紙調査表」は、富田正弘氏を研究代表者とする、科学研究費補助金（総合研究 A）「古文書料紙原本にみる材質の地域的時代的変遷に関する基礎的研究」（1992～1994 年）において、主として中世文書の料紙研究の成果により確立したものである。沖縄県内では「尚家文書」などの料紙調査所見の記録に使用されている。本研究代表者も先の研究（基盤研究 C 一般：課題番号 25370783）より使用しており、この「文書料紙調査表」に「評定所文書」と先島地方の文書の調査結果を記録し、その特性を明確にしていくことにより、視覚的に客観的な情報としての画像データとともに、これまでの成果を継承して琉球の文書紙料調査を体系化し、日本の古文書学研究の一環となることが期待される。

今回の計画においては、「評定所文書」の原本に対する悉皆的調査の基礎を確立することを第一の目標としている。そのためには、先島地方における近世文書類の所在調査と提案型の修復事業による、料紙分析まで一貫して行う成果の積み重ねにより、研究手法に習熟することが具体的な課題となる。対象としては、家譜など冊子体の資料が想定される。先島地域における調査は、八重山博物館・宮古島市総合博物館の協力を得て行う。国立公文書館の資料は 21 点 7760 丁ほどあり、いずれも内容一件ごとに綴じられているので、辞令書などの一紙文書と異なり、紙の密度を求めるために必要な紙厚計測などは困難である。装丁を解けば、一丁ごとの調査が可能である。綴じは典籍類よりも簡易であると見られる。ただし、紛失や錯簡を生じない確実な手順により調査し終了後には綴じ直すために、その技術的保障と収蔵機関の承諾が必要である。

①「評定所文書」の大部分を所蔵する国立公文書館の担当者に、研究計画の趣旨と計画について相談しており、まずは資料の保存・管理に影響を及ぼさない範囲の調査について、協力依頼する。東京大学史料編纂所の調査については、東京大学の小島浩之氏（経済学部資料室室長）に便宜をはかっていただくことの承諾を得ている

②研究協力者として、大川昭典氏（元高知県立紙産業技術センター技術部長）、富田正弘氏（富山大学名誉教授）により、和紙の素材・加工と保存技術の領域における調査支援および料紙的観点からの古文書の分析手法について支援を受ける。また、柳原敏昭氏（東北大学大学院文学研究科教授）により、近世文書の内容・様式について適宜指導を仰ぐ。製紙技術専門家の大川昭典氏（研究協力者）の指導の下、料紙繊維の顕微鏡観察により、その原料と紙質の所見を蓄積する。

③沖縄県内に現在自生し、行政文書の料紙の主原料となったと想定されるカジノキ（コウゾ）や先島特産のアオガンピを原料とする見本帳を作成する。先島地方では野外調査を行いアオガンピの植生などを把握する。見本紙の抄造は、沖縄県出身の和紙抄造家である安慶名清氏（那覇市首里儀保町　蕉紙庵）に委託する。これらの紙と中国産の竹紙や本州産の和紙を組み合わせた見本帳により、実地調査の利便性を高める。さらに、顕微鏡写真を掲載することにより、サンプルの画像照合にも利用できるようにする。

④「評定所文書」に限らず、状況によっては、修復事業を伴う提案型の調査を行い、料紙の顕微鏡分析を行う。さらに、取得した料紙の画像データにより、様式・内容にも踏み込んだ総合的な文献調査の実績を蓄積する。修復作業は、本研究の意義を理解し、実績のある専業者に委託する。その際に製作した複製本を所有者・収蔵機関に提供し、閲覧の便宜をはかる。

４．研究成果

本研究では、『琉球王国評定所文書』として刊行された史資料の原本と近世先島地方における古文書・古記録類について、料紙的な観点からアプローチすることにより、近世琉球における行政と楮紙との強い関係性を明らかにした。本研究の文書料紙調査表による所見では、楮紙の地合いはそれほど良質ではなく、量の確保が優先されたと推測される。「評定所文書」原本の料紙調査については、装幀を解いて料紙を広げる作業を行う場合、錯簡などが生じないように、専門家の支援が必要であり、より大規模な研究組織により時間をかけて行うことが適切であるという認識を得た。これは、家譜など袋綴じ状の冊子が多い近世琉球の資料について共通することであり、料紙修復や装幀補修の機会を逸しない調査が重要である。

先島関係では、宮良殿内文庫（琉球大学附属図書館蔵）の『遺老説伝』の装幀補修を実施して紙片を確保し顕微鏡撮影を行った結果、アオガンピとカジノキの混合した料紙を含むことが分かった。同文庫に未修復の青雁皮紙の資料が存在することも確認できた（2017 年度）。石垣市での調査では、アオガンピ製の料紙や近世八重山の政庁蔵元による「紙漉方并茶園方例帳」原本を確認した（2017 年度）。宮古島市では、研究協力者に同行してもらい宮古島市総合博物館収蔵の各種資料を調査した（2017 年度）。そして、染地氏の「勤書」（作成年代は現存最古）および「家譜」を対象とした修復を行い、料紙繊維の顕微鏡写真、図像データを得た。その結果、蔵元発給の「勤書」の役人個人の公務公役記録としての基本的性格を明らかにするとともに（2018 年度）、楮紙を使用する家譜の記事と和系の系図を整理し島の士族層の社会的なあり方を検討した（2019 年度）。

宮古島市と多良間村における野外調査では、沖縄県内の和紙抄造専門家安慶名清氏に同行してもらい、アオガンピを中心とする原生状況を把握した（2016 年度）。さらに、安慶名清氏の指導により和紙抄造の要領と用具の取り扱いについて検討した（2019 年度）。これは、「紙漉方并茶園方例帳」の記述に基づいて紙を抄造し、古文書調査で把握した近世琉球の料紙の特徴を実験

的に確認するための基礎的研究である。また、当地の文書が現地に自生する植物を原料にしたのかどうか検証するための参考資料として、安慶名清氏に委託して見本紙を抄造した。近世琉球の辞令書や家譜そして典籍の料紙には、中国産の竹紙が選択的に使用されているので、国内で竹紙を抄造する金刺潤平氏を研究協力者として、近世琉球の料紙を実見してもらい、その作品を見本帳に加えた。顕微鏡写真（琉球大学研究基盤センターにて撮影）と原料植物の線図（沖縄美ら島財団提供）も掲載する、本見本帳（沖縄本島産のカジノキ・バショウ、石垣島産アオガンピ、水俣産のタケを原料に抄造）は、文書・典籍の現地調査の際に照合して原料を判断する上で有用であり、本研究の意図や意義を理解してもらうために関係者に配布した（2018 年度）。

サンプル（資料より分離した紙片）の分析は、当初は高知県紙産業技術センターの機器を利用していた。現在では、本研究代表者自身が自分の研究室にて C 染色液を調整し（JIS-P8120 依拠）、実体顕微鏡でスライドを作成して生物顕微鏡で状態を確認の上、琉球大学研究基盤センターの機器（VHX-1000）を利用する一連の作業を習得したので、研究代表者自身で適宜実施できるようになった。

「評定所文書」については、原本からの紙片サンプル取得は実現できなかったが、東京大学史料編纂所の３点５冊（①咸豊 4 年〔1854〕「英人逗留付那覇ニ而之日記」2 冊 210 丁、②咸豊 4 年「魯西亜国船来着日記」1 冊 54 丁、③咸豊 3 年～5 年「逗留英人成行守衛方江御届申上候写」1 冊 259 丁）を対象とする透過光による顕微鏡観察の結果、「百田紙」の特徴である填料が見いだせないことを確認できた（2017 年度）。これは、琉球では填料（土粉）を加えていない楮紙を「百田紙」と称していたという推測を導く。「紙漉方并茶園方例帳」における製法もそれを支持する。また、「百田紙」と称される楮紙には沖縄産と薩摩産があり、後者は下賜品として史料上に表れるので、その品質の差が填料の有無であるのか、薩摩産の楮紙に関する知見を得ることが課題として浮上してきた。今後も料紙分析の観点から研究成果を積み重ねることにより、関係者の理解を得て「評定所文書」原本料紙の分析を実現したいと考えている。本研究の初期段階では、近世士族の家譜について検討し、両系による系図を作成するなどして琉球的な系譜観念の特徴を示した（2016 年度）。そして、家譜原本の多くを収蔵する那覇市歴史博物館における特別展示資料（池原家、伊江家、福地家文書）の調査の機会を得て、尚家文書中の詮議記録冊子の特徴についても知見を得た（2017 年度）。これらの成果により、竹紙、楮紙、芭蕉紙、青雁皮紙などの料紙体系に関する理解を深めることができた。

なお、「評定所文書」における紙に関する記事内容の収集を進め、文書行政や紙の生産・流通・使用に関する観点からの検討を行っている。さらに、本研究において、近世琉球の史料に多く触れたことにより、文献史学上の課題として、王統の継承と中国的な宗廟制度受容との関連性に着目することになり、「尚家文書」や「評定所文書」を史料とした近世末期の琉球の宗廟制度に関する論文を発表した（2019 年度）。沖縄県立博物館・美術館所蔵の『中山世鑑』『中山世譜』の系図に基づき系図と廟制とを関連づける論文も完成している。

研究最終年度末の段階では（2020 年 3 月）、先島地方の古文書等の所在について、博物館からの情報提供も寄せられ、より多くの資料による古文書研究・歴史学研究の進展が期待される状況である。一例として、宮古島市では、『平良市史』（1980 年）掲載の近世の辞令書について、12 点中 3 点の現物を確認し、あわせて保管されていた折紙を調査できた。実地調査では資料を探し出すことが主目的とされるが、さらに翻刻や影印出版が済んでいる資料の現状も調査対象とし、修復と並行した料紙の分析を行うことが史料学・古文書学の手法として有効であることを再認識している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 前村　佳幸	４．巻 97
２．論文標題 尚家文書「周九廟之図并円覚寺御廟之図」の研究（上）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『琉球大学教育学部紀要』	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 前村佳幸	４．巻 47
２．論文標題 琉球王朝末期の廟制ー寝廟と太廟の神主配置	５．発行年 2020年
３．雑誌名 法政大学沖縄文化研究所紀要「沖縄文化研究」	６．最初と最後の頁 151－202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 前村　佳幸	４．巻 95
２．論文標題 近世宮古島地方役人層の跡目継承ー「染地氏系図家譜支流」を中心として	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『琉球大学教育学部紀要』	６．最初と最後の頁 43-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 前村　佳幸	４．巻 93
２．論文標題 18世紀の宮古島一地方役人の“履歴書”ー「染地氏六世勤書」の料紙と様式ー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『琉球大学教育学部紀要』	６．最初と最後の頁 25－40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 前村　佳幸	4．巻 92
2．論文標題 宮良殿内本『遺老説伝』の料紙について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『琉球大学教育学部紀要』	6．最初と最後の頁 137-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前村　佳幸	4．巻 91
2．論文標題 近世琉球の先王廟と宗廟における昭穆観念	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『琉球大学教育学部紀要』	6．最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前村　佳幸	4．巻 90
2．論文標題 近世琉球の父系家統継承原理における“異例”の考察	5．発行年 2017年
3．雑誌名 琉球大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

前村　佳幸（著）「和紙の靱皮繊維の分析」（『琉球大学研究基盤センターだより』第2号、2020年3月、p.5）
前村　佳幸（編）「近世琉球の古文書・古典籍調査用資料の見本帳」（2018年9月）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大川　昭典 (OHKAWA Akinori)	高知県立紙産業技術センター技術第２部元部長	
研究協力者	富田　正弘 (TOMITA Masahiro)	富山大学名誉教授	
研究協力者	柳原　敏昭 (YANAGIHARA Toshiaki)	東北大学文学研究科教授	
研究協力者	小島　浩之 (KOJIMA Hiroyuki)	東京大学経済学研究科講師	
研究協力者	金剌　潤平 (KANAZASHI Junpei)	（株）水俣浮浪雲工房代表取締役	